

「翻訳」を内包する詩とはどのよ
うなものか
菊地利奈＋キャロル・ヘイズ訳
『対訳 左川ちか選詩集
Selected Translations of
Sagawa Chika's Poems』

思潮社
2023年、96pp.

川崎賢子
Kenko Kawasaki
立教大学 /
特定課題研究員・兼任講師

左川ちか(1911-1936)は、25歳の誕生日を迎えることなく早逝した。数年間の短い詩人としての生活のあいだに90篇にもみえない詩を残して逝ってしまった。数年前まで、いくつかのアンソロジーへの収録と、稀覯本となった詩集、一般の書店にはほとんど流通していなかった影印版資料集成などでのみ、読者を得ていた詩人である。風向きが変わり始めたのは、日本の外部から、翻訳によってだった。中保佐和子によるThe Collected Poems of Chika Sagawa (2014)は、PEN Award for Poetry in Translationを受賞し、そこからスペイン(ガリシア)、ポルトガル、アラビア語などによる訳出が展開した。英訳からの重訳ではない韓国語訳も試みられている。

その風圧に押されるように、この2年ほどの間に、『左川ちか全集』(島田龍編、書肆侃侃房、2022年4月)、『対訳左川ちか選詩集』(菊地利奈＋キャロル・ヘイズ、思潮社、2023年3月)、『左川ちか詩集』(川崎賢子編、岩波文庫、2023年9月)などの新たなテキストに加えて、『左川ちか モダニズム詩の明星』(川村湊・島田龍編、河出書房新社、2023年10月)、『左川ちか論集成』(川村湊・島田龍編、藤田印刷エクセレントブックス、2023年11月)などの関連書籍も上梓されている。北海道立

文学館において「特別展 左川ちか 黒衣の明星」も2023年11月18日から2024年1月21日にかけて開催された。閉ざされ、囲い込まれ、神話化されてきた左川ちかのテキストがひらかれ、複数性のなかで読まれる時がやってきた。

左川ちかは1911年北海道余市に、川崎チヨの長女・川崎愛(ちか)として生まれた。父親は知られていない。父を異にする兄と妹があった。7歳年長の兄・昇は短歌をたしなみ、伊藤整の親友でもあった。川崎愛は庁立小樽高等女学校(現・小樽桜陽高等学校)の補習科で教員の資格を得たのち、先に上京していた兄と伊藤整とのあとをおって上京した。雑誌編集の手伝いをしたり、翻訳を手掛けたりする過程で、彼女はペンネーム「左川ちか」と名乗る詩人となった。

翻訳者として出発した左川ちかが、翻訳によって海外で発見され、日本でも再評価を受け、本書のような対訳詩集の形で読まれるようになったことは、左川ちかの詩の特質を考えるうえで、まことにふさわしい形式を得たものと思われる。文字通り、左川ちかは「翻訳をみずからの「詩法」とした」のであるから。

本書は24篇の詩篇をおさめ、栗には左川ちか研究の先駆者である水田宗子、エリス俊子、松尾真由美が文章を寄せている。

本書の解説は、現代のポストコロニアリズム、ジェンダー・スタディーズの知見を参照しながら、次のように述べる。

(引用)

生まれながらのモダニストと北園克衛が評した、左川の型にはまらない自由な精神と発想は、彼女のジェンダーとルーツに深く関係している。左川は、女性であり、かつ、北海道出身者であったことから、「大和文化」を軸として発展した「日本文学」の世界からはみ出した存在であり、当時の「詩壇」に属しようがなかった。左川は、二重の意味で周縁化された詩人だった。(P.006)

帯文には、「北海道というポストコロニアル的周縁を生き」という文言もある。

それでいて、「伊藤整が「(文壇の)主流」からはみ出しているというコンプレックスを生涯抱いたのに対し、左川はそのような苦しみにとらわれることはなかった」のである。たしかに左川の詩には自己憐憫やルサンチマンへの拘泥がなく、乾いた抒情と躍動感、スケールの大きな生命感覚がいきづいている。若くして病に倒れたことも、衰弱の相としてあらわれるよりは、言葉の可能性を追求してやまない強度として詩に刻み込まれている。現代の若い読者を獲得しつつある左川ちかの詩の秘密は、そんなところにもある。左川ちかは読者の安直な予想を裏切る詩人である。

創作に先立って翻訳家であり、翻訳を内包したオリジナルな詩人であった左川ちかについて、本書は次のように解説する。ジェイムズ・ジョイスの詩集『Chamber Music』(1907)の全訳「室楽」に

において「原作の韻を放棄し、散文詩形式で訳すなど、大胆に独創的なアプローチをとった左川にとって翻訳と創作の境界は曖昧だった。左川は、日本語と英語の境界を自由に行き来しながら、翻訳を含む創作活動を続けた」。その過程で「通常の日語表現をディコンストラクト」するような実験も行われたと指摘する。とりわけ、翻訳の過程で「肉体的感覚と視覚的要素」が掘み直されているという指摘は大変興味深い。モダニズム詩の可能性とともに、翻訳の可能性をも発見させられる。

また、左川は短い詩人としての生のあいだに、自作を次々に改稿して発表したことでも知られる。ただひとつの正しいテキストや、完成稿を求めてというよりも、書き換えられるそのつど新たな相貌を見せるモチーフ、イメージの語られ方の複数の選択肢が示されているようだ。

この点について本書は、次のような見解を示している。「左川の詩には改作改題された作品が数多くみられる。この事実を「定本が定まらない」とネガティブに受け止めるのではなく、左川が私たち読者に残してくれた多層な読み方の提示だと受け止め、それらのバリエーションを積極的に取り入れた」と。「原詩が日本語であるからこそ言語構造上可能になる多義性を、英訳詩からも読み取ってもらえるのではないか」「日本語と英語、日本語によるヴァリエーション、英訳のバリエーション、これらを流動し呼応させながら、読者のなかに新たなる詩世界が生まれることを願ってやまない」と解説は結ばれる。

筆者は、愛唱する詩がどのように英訳されるのか、それによって見え姿がどのように変わっていくのか、大いに触発されながら読んだ。

たとえば「昆虫」という詩の冒頭、「昆虫が電流のやうな速度で繁殖した。／地殻の腫物をなめつくした」という詩行で「昆虫」は、「Beetles」と訳さ

れている。筆者はこは、もっとぶよぶよした青虫、芋虫のような虫の幼形のままの生殖と摂食行動をイメージしていた。ピカピカして硬い、おびただしい甲虫として訳されていて、翻訳とは解釈であると痛感する。

また左川ちかは苛烈な一行で詩を結ぶことが多いのだが、詩篇「緑」の最後の一行「私は人に捨てられた」は、どのような「人」に捨てられたのか、捨てた動作主体への興味が尽きないところ、英訳では「I was abandoned」とさりげない。逆にこのあたり、もしかしたら詩の発想において、詩語の選択において、「ひと」がもし「(hu) man」であるなら、その性別が男性であるとされる英文においてはどう書かれうるか、あるいは、捨てた主体を「人」とも明らかにする必要のない英文の詩行の場合であればそれはどのように書かれうるのかなど、左川ちかの脳裏を去来するものがあったのではないかなどと、考えさせられるところである。

類想の詩篇である「海の天使」「海の捨子」は、それぞれ最後の一行が「私は海へ捨てられた」「私は海に捨てられた」と書き分けられており、対訳は「I was abandoned into the sea」「I was abandoned in the sea」と訳し分けられている。翻訳という技の大胆さと繊細さを、ふたつながら味わうことができる。

私見によれば左川ちかは、モダニズム詩と戦後現代詩とをつなぐ、現代詩の起源にも位置する詩人である。「翻訳」は左川にとって詩法に内在する「外部性」だった。「翻訳」によって同時代の日本語を脱構築し、時に直訳調の詩語を駆使して、モダンの時空を裂開している。その詩は21世紀の読者にとっても新鮮である。その左川の詩の秘密の鍵のいくつかを明かしてくれる対訳詩集である。

